

kasuyo fukuda
福田和代

ヴィズ・ ゼロ

VISIBILITY ZERO

これは無料の立ち読み版
です。本文384ページ中、
プロローグだけを抜粋し
て掲載しました。

ヴィズ・ゼロ

福田和代

目次

プロローグ

十三年前 東京

六月 大阪

七月 東京

第一章

九月 香港

チエツクラップコック国際空港

グリニツジ標準時〇四二〇

福岡国際空港

グリニツジ標準時〇六五〇

関西国際空港

グリニツジ標準時〇七三〇

33

31

25

17

11

6

第二章

五年前 青島海岸

関西国際空港

グリニツジ標準時〇八三〇

関西国際空港

グリニツジ標準時〇九一〇

第三章

関西国際空港

グリニツジ標準時一〇一〇

第四章

関西国際空港

グリニツジ標準時一〇四五

94

80

77

48

45

関西国際空港
グリニッジ標準時一〇〇〇

関西国際空港
グリニッジ標準時一一四〇

第五章

関西国際空港
グリニッジ標準時一二〇〇

関西国際空港
グリニッジ標準時一三〇〇

第六章

二ヶ月前伊丹

関西国際空港
グリニッジ標準時一三二二〇

住民基本台帳ネットワーク全国センター
グリニッジ標準時一三三三〇

関西国際空港
グリニッジ標準時一三四〇

第七章

東京
グリニッジ標準時一四〇〇

関西国際空港
グリニッジ標準時一四三〇

関西国際空港
グリニッジ標準時一四五〇

関西国際空港
グリニッジ標準時一七三〇

第八章

関西国際空港
グリニッジ標準時一七五〇

関西国際空港
グリニッジ標準時一八〇〇

第九章

関西国際空港
グリニッジ標準時一九〇〇

160 139 136 129 119 114 110 102

215 212 199 195 186 181 172

関西国際空港
グリニッジ標準時一九三〇

227

関西国際空港
グリニッジ標準時一九四〇

234

関西国際空港
グリニッジ標準時二〇〇〇

244

第十章

関西国際空港
グリニッジ標準時二〇三〇

255

第十一章

関西国際空港
グリニッジ標準時二一〇〇

282

第十二章

関西国際空港
グリニッジ標準時二二二〇

297

関西国際空港
グリニッジ標準時二二四五

306

第十三章

ニューヨーク（決済銀行）
グリニッジ標準時二二〇〇

312

関西国際空港
グリニッジ標準時二二〇〇

313

第十四章

関西国際空港
グリニッジ標準時二二三〇

338

DC-9
グリニッジ標準時〇〇三〇

343

第十五章

関西国際空港
グリニッジ標準時〇六三〇

355

エピローグ

ニューヨーク
グリニッジ標準時一三三〇

376

371

プロローグ

十三年前・東京

夜のとぼりが、あたりを包みはじめていた。

播磨坂をくだる自転車の上で、彼は向かい風に目を細めた。人通りも、車両も少ない八月の夕暮れ。

銀色のアユのように坂を降りる。角を曲がったところで自転車を停めた。はきつぶしたスニーカーにジーンズ。小柄な文学青年ふうの体格。本郷のあたりにいくらでもいる、学生の一人だ。

ぽつぽつと街灯が輝きはじめる。次々にともっていく街の明かりを見ながら、どうして明かりというのは、こんなに幸福感を誘うのだろう、と思った。

穏やかな夕暮れだった。台風が通りすぎたためだろうか。嘘のように空気が冷えている。昨日までとぎたら、熱波でアスファルトが煮えたつようだった。

教会の鐘が、消え残る夕焼けの空に響いている。茜色に染まる響きがやむと、耳にはただ深い

静寂が残った。

どこかの台所から、ほのかな味噌汁の香りが漂いはじめた。ことごとと包丁を扱う手ぎわの良
い音。炒めものを作る油の匂い――

豊潤な香りが、気分を浮きたたせた。なにもかもが満たされていた。

(明日からなにをしよう)

と、就職の最終試験を受けてきた彼は思索した。手ごたえはあり、不安はなかった。約束され
た未来が、彼の前に横たわっていた。あとはもう、手を伸ばしてそれに触れさえすればいい。解
放感と満足感が、彼の肩をやさしくほぐしてくれていた。

とりあえず今夜は、仲間と夕食。

(おまえ、堅いからな)

と言った野口の口調を思いだす。彼は口もとをほころばせた。

(おもしろいところ、連れてってやるわ)

そういう野口はまるきり無頼の学生だった。煙草の煙がしみこんだ学生アパートに、キャンバ
スを何枚も持ちこんで、日がな趣味の油絵を描いている。専攻は哲学科だった。授業に出るより
テレピン油の匂いを嗅いでいるほうが長いだろう。

腕時計を確かめる。待ちあわせの時間をすこし過ぎていた。

(アパートまで行こうか)

野口が住む学生アパートは、通りの裏にあった。階段を駆けおりてくるころあいを見はからい、
ゆつくりと自転車を押して歩く。野口が遅刻とは珍しい。

もう来るだろう。

いまごろアパートの階段を、赤い顔をして駆けおりているはずだ。向こうの角を、必死で走っているはずだ——

誰の姿も見えなかった。

角を曲がるとき、男の声が聞こえた。

「ノグチ！」

と聞こえたそれは、威嚇に近かった。野口がどうかしたのか。彼は角から顔を出し、その光景を見た。

赤い鬼。

そいつが立ちほだかっていた。

振りあげたマサカリから新しい血がしたたる。アパートの門灯が、マスクにスキー帽という男の異様な風体をありありと照らしていた。灰緑のジャンパーもマスクも、返り血を浴びて真っ赤になっている。

野口は足もとに倒れていた。弱々しく腕を上げて頭をかばっている。かばっている頭から、血が吹きだしていた。

「エスは死ね」

冷静な声を耳にした。

(声が出ない)

見ているものが信じられなかった。

野口は悲鳴を上げ、必死で助けを求めている。血で汚れた顔で周囲を見まわし、人影を求め——
彼と目が合った。

(助けて)

唇がその言葉の形に震えるのを、たしかに見た。

ずっしりと重量を感じさせるにび色の刃が、野口の腹に叩きこまれた。野口の背中が、熱いものに触れたように跳ねあがる。足が痙攣する。彼もいっしょに震えた。

ようやく身体が動いた。男が野口の身体に何度めかの凶刃をふるい、ジャンパーを脱いで丸めながら、背中を向けたときだった。

泳ぐように角の家の扉に手をついた。自転車を手を離れ、派手な音をたてて倒れた。
男がこちらを振りかえった。

(——逃げる)

頭が指令していた。金縛りにあつたようにまた身体が動かなくなつた。

スキー帽のかけにのぞく切れ長の目が、奇妙なほど静かだった。エスは死ぬ、とついきましたが吐き捨てた男の目とは、とても思えなかつた。

マスクにべつたりとこびりつく血痕が、男の凶行を証明していた。

「……………」

突然の叫び声に男が走りだした。車のエンジン音が聞こえた。男を拾うために、だれかが離れた場所の様子を見ていたようだった。人影がアパートから飛びだしてくる。悲鳴。救急車のサイレン。急行するパトカーのサイレン……

いつのまにか野口のそばにうづくまり、手を握っていた。野口は額と腹の傷から大量の血を流しながら、まだ唇を痙攣させていた。かすかに息はあった。見ている人間に希望のかけらを与えらるほどではなかった。口の端についた血の泡だけを見つめていた。野口のたよりない息にあわせて、それはふつふつと唇の端に生まれては消えた。周囲で走りまわる誰の顔も見えず、なにも聞こえなかった。頭の中で反響しているのは、たったひとつの言葉。

エスは死ね、エスは死ね、エスは死ね——

「犯人を見たんですね」

「なにか言ってみましたか。声を聞きましたか」

救急車にかつぎこまれたときには、野口の息はなかった。

気がつけば事情聴取を受けていた。こちらの胸の底まで見透かすような刑事の視線だった。刑事たちは知らないのだった。彼が順調に道を歩めば、数年後には彼の部下になるかもしれないのだ。彼はためらい、首を振った。野口、これはおまえのためだ。やましさを隠し、心の中で野口に呼びかけた。

「——いいえ。なにも聞きませんでした」

言い終わると涙がこぼれた。自分の中でなにかが死んだ。その涙だと悟るには、長い時間が必要だった。

*

六月・大阪

長雨で路面は濡れたままだった。

そこらのくずかごから拾い集めてきた新聞紙を通して、冷たい湿気がじくじくと伝わってくる。着古した作業着の中にも水滴がにじんできた。着替えはない。彼はこれ一着で明日も仕事に出るつもりだった。

どうにか身体を横たえた。腹から背中にかけての痛みは、やわらぐどころかひどくなるいつばうだった。雨の匂いと、新聞紙のインクの匂いがした。

「まだ痛むのか。ワンさん」

向かいの商店の軒下で、彼とさほど変わらぬ風体の男が雨をしのいでいた。ビニール袋の包みからコンビニ弁当を取りだし、腕で雨を避けながら近づいてくる。

「ひどい蹴りやったな。いまの小僧らは、みんなあんなもんや。わしらのことなんか、さつさどくたばりゃええと思うとる」

これは見舞い、と男は弁当を新聞紙の上に置いた。昼すぎに軽自動車で現れた連中が、百円で売っていたしろものだ。賞味期限は過ぎているが、まだ腐敗臭はしない。

「すまんな」

「なあに。わしが腹をくだしたときには、あんたが粥を手に入れてくれたからな」

お互いさまよ、とつぶやきながら男はまた軒下に帰って横になる。

昨日の夜、近くで爆竹を鳴らしていた中学生の集団に注意をした。ひとりが荒々しい言葉を叫び、彼の腹に回し蹴りをくれて去った。ひどく痛み、すこし吐いた。痛みは蹴られたためだけになかったが、誰にもなにも言わなかった。

軒下にいる男は、まだいまだきの青少年に対する愚痴をこぼしていた。彼は痛みをこらえて聞き流した。そろそろモルヒネが必要な病状だった。ボランティアで回診にきた医師が、病院で診察してもらえと勧めていった。そんな金も度胸もない。いいさ。痛みが耐えられぬほどに育ったときは、そのあたりで首のひとつもくくってやろう。それで自分のくだらない、三十五年とおさらばできる。

濡れた地面を踏んで、この夜ふけに誰かが歩いていった。どうせ仲間の誰かだろう。そう思っただけ顔も上げなかった。他人に対する関心も、自分に対する関心も、もはや消えようとしていた。ただ痛みだけ。二倍ほどの大きさに膨れあがったすい臓をかかえた彼には、この世界に存在するのは痛みだけになるうとしている。そろそろ世の中と決別する潮時なのかもしれない。どのみちここでこうして、腐った身体を抱えて眠っている人生に、どれほどの意味があるというのだろう。期限が切れて捨てられたコンビニ弁当を、他人のお情けで手に入れて明日の食餌にしようというあさましさだ。

こんなはずじゃなかった。

ふと涌いてきたその感慨を、ワンはむりに腹の底に押しもどした。いまさらなにを言ったところで、自分の人生が泥の中で終わることは、どうしようもないことだ。ワンがいま、この状況で

も命を承らえていられるのは、あきらめることを覚えたおかげだった。そうでなければ、とうの昔に自分で自分の命を終わらせていたに違いない。

——いや、いつそそうすべきだったのだ。

自分で命を絶つ勇氣がないために、この十年近く、恥辱にまみれた生きかたを続けてきた。なんということだ。人殺しのくせに、自分の命は惜しいなんて。

「中谷さんですね」

足音は彼の背中の中のすぐそばで立ち止まっていた。しばらく黙ってワンの顔をのぞきこもうとしていたようだった。

「中谷一郎さんですね」

長いあいだ忘れていた名前だった。忘れなければならなかったが、記憶の底で絶えず警告を発しつづけていた名前だった。

弁当をくれた男は、むこうを向いて寝たふりをしていた。互いの過去や生活には立ちいらな。こんなところで仮の宿りをしているホームレスには、そんな不文律がなければつきあっていけないほどの、込みいった事情がある。

聞こえないふりをして黙っていた。男の手がそと肩を揺すった。女のように繊細な手つきだった。

「用があるんです。中谷さん。私はあなたの敵ではありませんよ。すこし、話を聞いていただけませんか」

「そんなやつは知らん」

うすく目を開き、横目で男の様子をうかがった。男が公安警察の人間なら、蹴りとばして逃げる。そのまま近くの川にでも飛びこんで死ぬつもりだった。正体がばれてまで、意地汚く生きのびるために警察の世話になるつもりはなかった。

男は三十をすこし越えたばかりに見えた。街灯の白々とした明かりの下で、サングラスをかけているのが異様さを増していた。顔だけは端正だった。身体全体から匂うような、ひんやりとした爬虫類の印象が、男の姿を際立たせているのはまちがいがなかった。

「あなた、猟師になりませんか」

男が隠微な微笑を浮かべながらささやいた。

「人間を狩る猟師に」

「——あなたはキリストか？ 残念だったな。俺はペテロじゃない。それにペテロは海で魚を獲るほうの漁師だ。猟師じゃない」

「まさか」と言つて男は満足そうに笑つた。笑つた顔も、精神のほの暗さを思わせるかげりを含んでいた。警官ではない。マスコミの関係者とも思えなかった。男からは、まちがいがなく同類の匂いがした。

同類。——と考えて彼はあわてて首を振る。同類などいない。いれば、いまこんな場所にひとりで横たわっているはずがない。

「あなたの腕が必要です。昔のことはすべて知っています。わたしを助けてくれませんか」

死にかけてこの俺の腕が必要か。優しい言葉だな、と彼は皮肉に笑つた。

「よそを当たれ。俺は中谷なんて名前ではない」

「毎日来ます。いまのあなたには、医者も必要なではありませんか。もう一度だけ、連中にひと泡ふかせてやる気はないですか」

「連中？」

男が腕を上げ、指さす方向は見なくても知っていた。ほっそりと長い指の向こうに、警察署の明かり。

背中を見せたまま無言でいると、男が歩きはじめるけはいがした。明日からは別の場所で寝泊まりすることしよう。みな似たような風体で、似たような場所で生活している。いつのまにかひとり消え、別の場所にひとり増えたところで、誰も気にとめないだろう。いまの男も自分をすぐに見つけることはできないはずだ。もし、それでもまだ追いかけてくるなら——

「ワンさん。あいつ、角の店の前で待つとるで」

向かいの男が気になつたらしく、首をもたげて確認し、不安そうに言った。

「なんや、あの若いの。気色の悪い」

待っている、か。自分を待つ人間など、この十数年、ひとりもいなかった。彼はもそもぞと身じろぎし、閉まつた焼肉屋の前で雨を避けているらしい男の横顔に目をやった。

サンングラスに隠れた目が見たかった。男は煙草をくわえると、ライターの火を近づけてこちらを見た。煙草の先が、挨拶するように跳ねあがった。

それでもしばらくじつと横になっていた。男を試すつもりはなかった。自分に人を試す資格などあるはずがない。ただ、起き上がり、男のところまで近づくことすら億劫に感じた。このままそっとしておいてくれればいいのにと願った。自分のことなど、忘れてほしい。なぜいまごろに

なつて、忘れた名前を思い出させようとする。

（——わたしを助けてくれませんか）

彼はまたもぞもぞと動いた。なぜ自分がこの死にかけた身体をひきずつて、あの清潔らしい若いのを助けてやらなきゃいけないのだ。

薄暗がりをすかして焼肉屋の前を見つめると、男の姿はまだそこにあつた。煙草の火はまだついていた。男の足もとには、火の消えた煙草の吸殻が山のように踏みじられているのだろう。男はこちらを見ていない。サングラスに隠れた目は、夜の闇の奥深いところをじつと見つめてゐるようだった。

（連中にひと泡吹かせてやりませんか）

たしかにその言葉は、彼の神経のどこかを刺激していた。忘れたと思つていたなにか。とうに失つたと感じていたなにか。

——自分に残されたものといえ、新聞紙の寢床と百円のコンビ二弁当。たつたそれだけしか持たない男が、なにをためらう必要があるのだろう。命さえ残り少ないというのに。

唐突に彼は起きあがり、寢床がわりの新聞紙や雑誌の束をそのまま残して、歩きはじめた。もらつた弁当は、なんとなく掲げていた。向かいの男はもうなにも言わなかつた。ただため息に似たなにかをもらし、くるりと背中を見せたようだった。

残り火に油を注がれたというほどではなかつた。崖から飛びこむことをためらつていた自殺者が、背中を軽く押しもらつたようなものか。そう考えると自然に笑いがもれた。なんだか知らないが、こととしいによつては話に乗つてやつてもいい。

「あなた、名前は」

「私のことはシンと呼んでください」

「俺はワンだ」

ふっきらぼうに彼がささやくと、シンが軽くうなずいた。

「では行きましょう。狩りに」

狩りに、と言ったシンの唇が、奇妙にねじれた笑いを浮かべた。やはりサングラスの奥は見る
ことができなかった。

*

七月・東京

たった十キロのランニングで、汗がにじんだ。

甲斐徹が平和島の公園を走り、環七通りの裏にあるマンションに帰ったときには、すっかり息
が切れていた。

ビールと氷。ひとり暮らしの冷蔵庫にはほとんどそれくらいしか残っていないかった。

職場の環境が変わって一年。一年前には欠かさなかったランニングも、このところごぶさただっ

た。身体は正直だ。

勤めの帰り、京浜東北線の窓から二十日の月が見えた。いつも目にしているはずだったが、突
然むしように走りたくなつた。

(月見て走りだすなんて、あんたは狼だね)

大森駅で降りるまぎわ、沼部まで帰る同僚が、からかうように言つて笑つた。

背広と革靴のきゆうくつなおお仕着せでは、走ることもできない。着がえるためにマンションに
立ちよつた。脱ぎ散らかした背広ネクタイの小山を眺めた。ふと、この一年で自分が身につけざ
るをえなかつた、窮屈な鎧を脱ぎすてたような気がした。あれはただの錯覚だつたのだろうか。

——なにも考えずに走つた十キロのおかげで、ひどく気分が晴れていた。身体の外に出ていっ
たのは、汗だけではなかつたのかもしれない。いつのまにか、腹の底に蓄積されていた茶色い澱
が、汗とともに出ていった。

この十数年分のよどみが、すっかり消えたとは信じられない。それでもわずか数十分のあいだ
に、これほど自分の気持ちに変化が見られるとは思ひもかけないことだつた。

窓の外には小さなベランダと、殺風景な街なみだけがあつた。公団住宅の屋根また屋根。ひど
く白々しい街灯。ほかにほなにもない。いつもと同じ、人工的な夜の風景。

窓を開けると煮えたアスファルトの匂いがした。熱気とタイヤの摩擦で溶けた道路の匂いだ。
時おり混じるかびくさい雨の匂い。夕方降つて、すぐさまやんだ通り雨。

救急車のサイレンが近づき、遠ざかつた。またどこかで人が死ぬ。車のクラクションが重なり
あつて聞こえる。遠い。別世界の音のように遠い。

水の袋を破り、ふたつつかんで口に入れた。溶けだした水を頭の上からかぶる。髪からしたたる水が肩を濡らし、沸騰した頭が冷える。目を閉じて、しばらく動かずにいた。舌の上でとろけた氷が、胃の腑にしたたり落ちるのを静かに感じていた。

冷蔵庫の隅にひとつだけ残っていたトマトにかぶりつき、グラスに溶け残りの氷をすべてぶちこんだ。今夜の主食は、到来物のウイスキー一本。

ダイニングにもライティングデスクにも早変わりするテーブルの上に、昨日とどいた母親の手紙が放置されていた。

——そういえば、今年のいかなごの漁はどうだったのだろう。手紙には年とった父親の漁のこと、老朽化した船のこと、漁獲量のことなどが並べられており、最後にはいつも、こちらの安否を問う短い文句がさりげなく書かれているのだった。すべての行間からにじみ出ているのは、瀬戸内海の小さな島に帰り、父親の跡を継いで漁師をやらないかという、十年來の母親の望みだった。父親はなにも言っておきさない。東京の大学を出て公務員になった息子が、いまさら都会の生活を捨てて、故郷に帰るはずがない。そうあきらめているのだろう。

(また返事を出しておかないとな)

ふたたびテーブルに投げだされたそれは、あたしらはここにいるよ、という母親の自己主張そのものだった。

グラスを握り、寢室のドアを開けた。

その部屋だけは、主がいらないあいだも生きていた。明かりを消した室内に、ちらちらとディスプレイの光点がまたたいている。エアコンで室内を一定の温度に保っているため、汗が急激に引

いっていく。

一台のデスクトップ型サーバー・コンピュータに、ノート型パソコンが二台。レーザープリンタから、ひっきりなしに印字された紙が吐きだされる。サーバーの前に座り、画面に表示された複数のターミナルウィンドウと、英数字の羅列を眺めた。サーバーだけは、光回線で二十四時間外部と接続している。あとの一台はサーバーとLANで接続し、サーバーの制御と監視をしている。残り一台は、どのコンピュータとも接続せず、モバイル用のPHSカードを使って、インターネットに接続できるようにしている。こちらはほとんど、メールチェック用だった。

「ハニー。調子はどうだ」

コンピュータの画面にむかい、声をかける。ウィンドウに表示された文字をチェックする。

ガラスの中身をなめた。こいつらはよく仕事をしている。秋葉原のジャンク屋でかき集めてきたマシンだとは、とても思えない。

外部に接続したサーバーは、『蜜の壺』（サーバーホスト）と名づけられている。名前の通り、侵入者をおびきよせるための甘い罠だった。一台のコンピュータ上で、複数のOSをバーチャルに稼働させるVMウェアというソフトを使っている。外部の接続者からは、ウィンドウズとリナックスの二台のコンピュータが存在するのように見える。

セキュリティの設定を甘くしてあるため、サーバーに侵入するのはさほど困難ではない。クラッカーの興味を引きそうな、警察関係の事件ファイルや個人情報をちりばめてある。甲斐が手間をかけて捏造（ねつぞう）したものだ。

それから、きわめつけのえさがひとつ。サーバーへの侵入はある程度の知識とツールがあれば

可能だが、特定のディレクトリに関しては、よほどの腕の持ち主でなければ侵入できないよう高度なセキュリティを施している。技術力を誇りたいクラッカーは、かんとんに侵入可能なサーバーになど興味を示さない。甲斐は、もつともガードの堅いディレクトリに、巨大なサイズのデータをいくつか置いた。ダウンロードを試みる侵入者が、しばらくマシンから逃げ出せないようにするための足かせだ。

インターネット上で、うっかりこのサーバーを見つけてしまったクラッカーは、いかにも甘くて美味しそうなその外見にだまされて、侵入の痕跡をべたべたと残していく。蜜の壺には足跡が残りやすい。侵入者のIPアドレス。手口。キーストローク。

ここ数日の侵入件数は、万単位に増えていた。クラッキングの初心者から、海外の強者まで。アンダーグラウンドな掲示板に、こいつの存在が紹介された。どこまで入れたかを競う文章が、掲示板をにぎわしていた。ハッキング。あるいは、クラッキング。そう呼ばれる行為だった。世間で考えられているよりずっと、地味で根気のいる作業だ。得られるものは少なく、失うものは大きい。

ノートパソコンでメールをチェックすると、昨夜問い合わせた質問の回答がいくつか、サーバー・プロバイダ各社や、サーバーの管理者から返ってきていた。ハニー・ポットへの侵入者のIPアドレスをもとに割りだした、侵入の踏み台にされたマシンの管理者たちだった。クラッカーは自分の正体を隠すため、複数のプロキシ・サーバーを経由して目的のマシンへの攻撃を繰り返す。メールの回答には有益な情報は見当たらなかった。

甲斐が待っているのは、ただひとりのクラッカーだった。

(来いよ)

その名前が掲示板でささやかればじめている。最後のディレクトリまで、侵入を果たすことができる有力な候補者のひとりとして。

(来いよ、ファントム。おまえのために作った畏だ)

—— ネットワークの向こうで、同じようにキーボードに向かっているはずの、ひとりの男を思いうかべた。見たこともない男。その男の心のひだの一本一本、理解はできないが想像はできるような気がした。暗い室内、輝くディスプレイ。ただひとりキーボードに向かい、ひたすらコマンドやパスワードの入力を続けている男。

ぼんやりとグラスの中身をあおった。

『正義』とはほど遠いものに動かされている。そう感じたのは初めてではない。

(——ハマったね)

甲斐が探しつづけている相手なら、そんなふうに軽やかに表現するのかもしれない。しいて言うなら人間への興味とでも答えるしかない、あいまいな目的のため。あの男を——探しつづけている。

床の上に積みあげられたマニュアル類とプリンタの用紙。複雑にからみあったケーブル類。ベッドはその中に埋もれている。二枚の額縁が目に入った。警視総監賞の賞状が、恥じっているようにベッドの影に隠れていた。この男は警察官だったが、いまや警察官でなくなるうとしている。そんな気がして、口をゆがめた。

突然、プリンタが狂ったようなスピードで、紙を吐き出しはじめた。

侵入者だ。

甲斐はサーバーの画面に飛びついた。誰かがウィンドウズの仮想環境に侵入し、猛スピードでコマンドを実行している。慣れた手順とセキュリティ・ホールを利用した高度なテクニク。素人ではない。侵入者がなにを目標にしているのかは、一目瞭然だった。もともとガードが堅いディレクトリへの侵入。そこにあるデータのサイズを確認した瞬間、侵入者は迷わずすべてのデータを削除した。いつのまにか見たこともないバッチプログラムが、ハニー・ポット上にあった。やられる。

そう思った瞬間、侵入者がコマンドを入力した。

—— P H A N T O M .

フアントム。

バッチプログラムの起動とともに、サーバーの画面からウィンドウズのターミナルウィンドウが姿を消した。VMウェアごと、ダウンさせられたのだ。

プリンタから吐き出された用紙をチェックした。最後に侵入したフアントムのIPアドレスが、しっかりと残されていた。何重にもブロック・サーバーを経由し、巧妙にガードしたアドレスかもしれない。それでも貴重な手がかりであることはまちがいない。

怖いくらい、鼓動が速い。呼気が荒い。

(フアントムが、かかった——)

——電話が鳴りはじめた。

奇妙な予感があった。受話器の向こうに、息をひそめて沈黙している誰かのけはいがあった。

しのびやかな息づかい。

「――名前ぐらい。名乗れよ」

グラスの中身。氷が溶けて薄くなっている。名乗らない深夜の電話。珍しくはない。しばらく黙って、互いの息づかいに耳を澄ませる。

『ファントム』

ささやくように男が言った。新しい酒をついだ。いたずらだ。そう思いこもうとした。受話器を戻そうとした。

『――助けてくれ』

今度はすこしはつきりと、男が言った。

『ほんのすこし。あとほんのすこしでいい。見逃してくれ。甲斐』

声を出そうとしたとき聞こえてきたのは、冷たい交換機の発信音だった。

グラスを空けた。胃の中が焼けるように熱くなりはじめていた。氷を囓んだ。くだけて溶ける氷のかけらが、熱い舌に心地よかった。

つづきは書籍版でお楽しみ下さい。

福田和代 ふくだかずよ
1967年、神戸市生まれ。ハードSFを愛するあまり工学部に進むが、途中でミステリ（冒険小説）に転向。本業は金融機関のシステム開発を手がけるシステムエンジニア（現在は人事を担当）。システムアナリスト資格保有。両親およびゴールデン・レトリバー1匹と同居。

電子立ち読み版 ヴィズ・ゼロ

2010年7月27日 立読版 発行

著 者 福 田 和 代
発 行 者 青 木 治 道
発 行 所 株 式 会 社 青 心 社

〒550-0005 大阪市西区西本町 1-13-38

新興産ビル720

電話 06-6543-2718

FAX 06-6543-2719

振替 00930-7-21375

<http://www.seishinsha-online.co.jp/>

落丁、乱丁本はご面倒ですが小社までご送付ください。送料負担にてお取替えいたします。

© Kazuyo Fukuda 2007

ISBN978-4-87892-336-4 C0093

ヴィズ・ゼロ 電子無料立読版 無料

『ヴィズ・ゼロ』は、
全国の書店でお買い求めいただけます。

当社直販を希望の方は下記 url へ
<http://www.seishinsha-online.co.jp>

青心社

Visibility Zero